ジョン・ロックの生涯と思想の展開（II）

― 青年期の環境 ―

井　上　公　正*

John Locke's Life and his Development of Thought (II)
- The social Environment of his Youth -

Kimimasa Inoue

要　旨

前回の拙論では自由主義の祖といわれるイギリスの哲学者のジョン・ロックの人間形成の要因となったかれの幼・少年期の社会的環境、つまり内乱の起こる頃までの社会の情勢、ロックの家の階層と両親による教育等について述べた。この小論ではそれ以後の社会の情勢、ウェストミンスター・スクールやオックスフォード大学におけるロックの学生生活等をとりあげ、これらがかれのパーソナリティの形成過程において、かれの行動傾向の基盤的体制を形成する要因となり、この体制がかれの後年の思想や行動の素地となり、基層になって、かれの社会思想、とくに自由主義思想を形成し、それらを特徴づけることになった、と思われる。かれが自由主義の核である「寛容」に関心を抱くようになったのは、かれが学生時代に経験した騒乱、なかんずく、ピューリタンの狂信的行動や政教一致の体制のもたらす自由の抑圧にあった。

I　ロックの就学前のイギリスの社会情勢

1642年に国王チャールズI世の挙兵によって内乱が起き、1646年に議会派の勝利によって騒乱は一応終息した。騒乱発生時の議会派思想家は、かれらの権利主張を伝統や慣習、つまり伝統的コモン・ロウではなく、理性や自然、いわば普遍的自然法にもとづく権利思想によって基礎づけている。議会派の権利思想は、自然理性のなかに神の似像を求めんとする合理主義あるいはヒューマニズムが濃厚であり、ジェントリ、商人、富農などを担い手としつつ、近代的経済社会を志向するものとして展開されていった[1]、そして後にロックによって受けつがれ、より洗練されることになる。とくにかれらの主張する財産権の自由は、第一に、反独占つまり生産活動と商業の自由であり、第二に、上位領主権の廃棄による土地所有の自由であり、第三に、

平成8年9月24日受理　*社会学部非常勤講師

不法課税にたいする反対であった。このような主張は、スチュアート絶対主義の反動的干渉を排除するイデオロギーであって、所与の社会・経済体制に組み込まれており、現実的であった。したがってロックのような財産権が既存の社会・経済制度に先行する天与の生得的権利であるか否かという問題を提起するまでには至っていない[2]。

この頃、主教制度を批判するジョン・ミルトン（1608－1674）は、『イングランド宗教改革論』(1641)、『教会統治の理由』(1642)、『アレオパジティカ』(1644) をつぎつぎと執筆し、良心の自由あるいは宗教的寛容のための訴えをしている[3]。トマス・ホッブズ（1588－1679）は、かれの哲学体系第三部『市民論』De Cive（1642）をパリにおいて匿名で出版している。また、デカルトが『哲学原理』(1644) を著している。12歳のロックがこれらの著書を公刊直後に読んだとは考えられないが、いずれ後年影響されることになる。

騒乱に目を向けると、陣容をたてなおした、後にニュー・モデル軍とよばれることになる議会軍は、1645年6月（ロック13歳）にネーズビーの会戦で王党軍を完敗せしめ、戦況は議会軍に有利になり、勝利は戦う度ごとに議会軍の手に帰し、1646年6月には、王党軍の大本営のあったオックスフォードは陥落し、5年間にわたって闘われた第一次内乱はようやく収まった。こうして革命の主導権は議会派、就中独立派に掌握された。国王チャールズⅠ世はオックスフォードの陥落直前に保身を目論むでスコットランド軍の陣営に投降したが、その目論見は呆気なくはずれ、王は、1647年1月にスコットランド軍により、議会軍の手に引き渡された、というよりは売り渡され幽閉された。1647年にロンドンの近郊でいわゆるパトニー討議が行われて、軍幹部と水平派の人々の間で討論が行われた。これは、近代民主主義の基本をなす考え方が提示された点で後世の歴史に残る重要な出来事となった、といわれている[4]。このような内乱やこれに伴って起きたロックの家庭の事情－父親の参戦と私財の喪失という不幸－は、すでに述べたように、ロックの心に何らかの影を落としたと思われる[5]。かれはおそらくこの騒乱を好ましいものとは思わなかった。

Ⅱ　ウェストミンスター・スクールの生徒

革命が収まった頃、ポパムはサマセット州のバス出身の地方議員になり、ロックの父は州の官吏となった。ロックの家は、父の従軍、敗北、私財の喪失という事情から、経済的にはけっして楽ではなかった、と思われるが、両親は子供の教育に熱心であったので、ロックは学校教育を受けることになった。1647年、議員のポパムは、議会の支配下に入ったロンドンのウェストミンスター・スクールへ議員の推薦権によってロックを入学させるように尽力している。この学校は今も存続していて、ウェストミンスター寺院の近くにある。建物は現今よりもずっと小さかったといわれている。15歳のロックは、同年秋にこの学校への入学を首尾能く許され、新しい運命を開くことになった。この好運は、ポパムと父との多年に亘る親交がもたらした配慮にもよるが、ロックの側にも好運を招くに足る資質があったのであろう。ポパムは、ロックが優秀で将来秀でる少年だ、と見込んでいたに違いない。15歳の入学は、年齢的にはかなり遅れているが、おそらく騒乱に伴う混乱によるものであろう。

ウェストミンスター・スクールの校長は、リチャード・バズビであり、「パブリック・スクール組織の樹立者」と後世呼ばれることになった有能な教育者であって、その厳格な古典教育は永く模範になった、といわれている[6]。かれは、1638年に校長に就任しており、熱烈な王党派であったにもかかわらず、それを隠そうともしなかったが、議会によって寛大にもその地位に留まることを許されたので、内乱の時代にもその職を離れず、1695年まで職務を遂行した[7]。

かれは幸運にも生徒たちに恵まれていた。すなわち、後期ステュワート期に活躍した偉大な人びとのかなりの人たちはかれの教え子たちであった。それは、かれが教育に対する秀れた才能をもっていた、ことを示すのかも知れない[8]。かれは学校では度々笞を用いたが、しかしロックは笞を受けず、むしろバズビのお気に入りの生徒の一人だったようである[9]。

この学校では、まる4年間ラテン語・ギリシァ語が教えこまれ、さらに最後にはヘブライ語・アラビア語が少々課せられた。生徒たちは、早朝の祈りをすませると朝食前6時から8時までの2時間、ラテン語・ギリシァ語の文章の英訳と解釈とを学び、朝食後9時から11時までは逆に英文をラテン文やギリシァ文に訳したり、散文や韻文を作ったりする。昼食後1時から3時まで同様な勉強を繰り返し、3時から4時まで自由に遊ぶことができる、という教育過程であった（以上は正確には上級生の日課であるが、入学早々の下級生もこれに準じて文法や作文を習うことになっていた）。1週の前半4日間を上述のような日程で過し、金曜日には自修をする。そして土曜には全学年の生徒が一緒になって、古典語での演説や討論の会を開くのである[10]。ロックもこの学校で教育課程にしたがってラテン語とギリシァ語を修得し、さらに古典に通じるようになり、基礎的な教養を身につけた。この学校での学習がロックを学者に仕立てることになる素養となり、また後年のロックの思想を大成させることになった、といえよう。『人間知性論』にみられる密度の高い論証もある点でこの頃の学習によって培われた、と考えられる。だが、このようなギリシァ語やラテン語等の無味乾燥な語学の暗記や記憶の競走に追われた学寮生活はロックにとって苦痛で楽しいものではなかった。従ってかれはここでの学習課程にはむしろ批判的で、語学にあまり時間をかけ過ぎるし、また教育が厳しすぎるとして、後に不満をもらしている[11]。ロックにとって快適でなかったこの学校の修学期間は4年であったが、はじめに王室給費生となるための準備期間があり、これをも勘定に入れると、ロックは5年間ここに在学したことになる[12]。今日ロックの蔵書として残されている多く古典は、主に、この頃からかれによって買い集められたものと考えられている。ロックは、ウェストミンスター・スクールに在学したことによって、もし当時の社会情勢に興味をもてば、まさに有利な地点からそれを眺めることができたであろう[13]。だが、徹底的な古典の学習に追われ、外界の荒れ狂う出来事についてじっくりと考えてみる時間はほとんどなかったであろう、また、関心を向ける年齢には達していなかったかもしれないが、しかし国王の処刑は、後に述べるように、ロックにとっては衝撃的出来事であった、といえよう。

内乱終結後の体制に関して、議会派を構成した長老派（国王と妥協）、独立派（王権を議会の権力下におく立憲君主制）、水平派（議会が最高権をもつ共和制）の間に対立が生じ、とくに後二者の激しい争いが続いた。この間幽閉中であった国王はスコットランドの長老派と通じて、両者は軍事同盟を締結した。1648年2月に、ウエールズやその他の地方に王党派の反乱が起こり、第二次内乱が起こった。これまで激しい争いをしていた独立派と水平派は急速に和解し、8月には王党派とスコットランド軍を撃破して国王を再逮捕した。この頃、ロバート・フィルマー（？－1653）が『制限混合王制の無政府状態』[14]ほか二篇を著している。また、リチャード・フッカー（1554－1600）が『教会統治法論』[15]を出版している。なおこれは1666年、1667年にも出版されている。ロックは、この論文の一部を後にかれの有名な論文である『政府論』において引用しているが、当時は未だ読んではいない、と思われる。

1649年1月、独立派は、クロムウェルの軍隊によって、長老派を議会から追い出し、残った議員だけで国王を審問し、かれを処刑し、いわゆるピューリタン革命を遂行した。ついで5月には共和制が宣言され、クロムウェルが政権を握り、政府を樹立した。国王が処刑されたのは、ロックがウェストミンスター・スクールに入学した翌々年の1649年1月30日であり、ロックの

16歳の時であった。国王が処刑されたホワイトホール・パレス・ヤードはかれの学校のごく近い所にあった。校長バズビは、全校生徒を学校内に集めて、国王のために公然と祈った。ロックは、議会派支持という、時に、みじめな家庭環境の中に育ったとはいえ、多感な年頃になっていたので、国王の処刑というイギリス王室上またとない稀有な悲劇、悲痛なシーンを見ることはできなかったにしても、それを見ようと押しかけてくる群衆のすざましい叫び声をおそらく学校の中から聞き、かなりのショックを受けたに違いない。ロックの蔵書の中から当時の議会の布告文や政治的パンフレットなどが多数発見されていることは、ロックが革命に対して強い関心を抱くようになった、ことを示すものといえる。注目すべきことは、ロックがこの熱狂的なピューリタン革命とその凄惨さ、非寛容さを冷静に眺め、批判的にならざるをえなかったことである。ロックは、宗教という衣をまとった騒乱の最中に育ち、身をもってその害を知り、政治的狂信の行き過ぎに対して、かれの心に蟠っていた嫌悪の情をいっそう強めたように思われる。政治と結びついた宗教的狂信に対するロックの不信も、また、この時期にかれの心に植つけられたのである。

ロックの学んだウェストミンスター・スクールの校長バズビの影響も見逃せない。すなわち、かれは、自ら信じるものを熱烈に信奉したが、固陋な狂信者ではなく、かえって生徒たちに、説得に注意し、権力者の言葉や主張をなにも考えずにそのまま受けいれないように、と教えた[16]。かれのこのような態度がロックに影響したと考えられる。バズビの国教主義が、ロックを、かれの育った家庭のピューリタン信仰から離脱させるとともに、また、国教会以外の信仰を全く忌避してしまうことをしないバズビの幅広い態度は非寛容と狂信とを戒める穏やかな心の持ち方をもロックに教えたのである[17]。したがって、このような心のもち方が青年ロックの心の奥底にきざみつけられ、十数年後に現れることになったといえよう。こうしてロックに自由主義への道を進ませることになったバズビの功績は大きい。この頃ワダム・コレジの学長ジョン・ウイルキンズ（1614—1672）を中心に「実験哲学クラブ」が作られ、医学、新科学の実験と研究が行なわれ、ロックが後にこのクラブの影響を受けることになる。この年の11月に、デカルトが『情念論』を出版している。

ロックは、この学校で優秀な成績をおさめ、1650年には「小選抜」（minor election）に合格して王室給費生（国王奨学生King's Scholar）に選ばれている[18]。従来の伝記著述家は、ロックがこの学校へ1647年に入学したときに、王室給費生になった、と述べているが、クランストンの説が正しければ、それは1650年である[19]。かれが王室給費生になったことによって、かれは学校に寄宿できるようになり、経済的に楽になったが、なお重要なことは、かれが小選抜に合格したことがケンブリッジ大学のトリニティ・コレジもしくはオックスフォード大学のクライスト・チャーチの給費生に選ばれる「大選抜」（major election）に参加する資格を得たことであり、また、将来かれが学者の道を進む特権的地位を約束されることになったことである。このような好運がめぐってきたのはかれ自身の力によるものであった。すなわち、かれの学才と努力とが無味乾燥で厳しい古典教育に耐えて、激しい競走による選抜試験にかれを合格させたのである。ロックより5歳年下の弟トマスも1651年にこの学校に入学したが王室給費生にはなれなかった。この小選抜というのは厳しい学力競走によるもので、その方法は「挑戦」（challenge）と呼ばれ、下位の生徒がすぐ上位にいる生徒とギリシァ語、ラテン語からヘブライ語・アラビア語まで学力で競走し、挑戦を受けた生徒が失敗し、挑戦者が勝てば順位が入れかわり、こうした挑戦が絶えず繰り返し続けられる仕組になっていた[20]。挑戦者のなかには12・3歳のものもいたが、ロックは18歳の時に挑戦したのである。1650年の小選抜の候補者のリストの中に、1から20の数字が名前に対して付けられたものがあり、おそらく序列を示すもので

あり、候補者たちが挑戦の結果、位置づけられたものと思われる。ロックには10という数字が付けられているので、10番ということであろう[21]。ロックがこの学校で受けた教育に対して批判的であったことは、クランストンが指摘したように、後にロックによって執筆された『教育論』によって知られる。かれによれば「上手に暮すことと、人間が当然すべきように、自分の事を世間で処理する腕前が、学友に伍して習ってくるあの図々しさ、瞞着、あるいは暴力とどれほど正反対のものであるかを考えるほどの人は、個人教育の欠点の方が、このような改善といわれるものよりも、限りなくましだと思うでしょうし、親の身近にいて、有益で能力のある人間を作る諸性質をもっと与えられる家庭で、子供たちの無垢な心と慎みを失わさないように気を配るでしょう」[22]。ここで述べられていることは、学校が生徒に課すカリキュラムや教育法の問題よりも、むしろクラスの生徒間の人間関係から起こる問題、つまりマイナス面を指摘し、家庭教育、要は父の教育方針を評価したものである。また友達間の人間関係でロックが嫌な思いをし、苦しんだことを示したものといえよう。ロックは、おそらく、他の友達よりも年長で、クラスの実態を客観的・批判的に見ることができたのではないであろうか。ロックの好むと好まざるとにかかわらず、幼少年時代に受けた学校教育・家庭教育はかれの学者としての人間形成には貢献したといえよう。なお、当時、ロックによって記された出納帳が残っているが、ガウンの洗濯代、散髪代金など細い点まで記録されているところをみると、几帳面な性格がこの頃すでにロックに形成されていたことが推測される。かれの後年の論証の緻密さも青年期頃までに培われた几帳面な性格に由来するものといえよう。出納帳を詳細に見れば、ロックの生活の実態を知ることができるであろうが、手もちの資料では出納帳を全部見ることができないので、この点は省略するが、ライデンによれば、父からロックに与えられる金は父の二人の友人によって手渡された。1650年11月から1651年5月の間にロックは14ポンドを受けとった。何に使われたかといえば靴の修理、服、トイレット用品、ろうそく、寝台の設備、洗濯、管理人の四半期分の報酬（1ポンド）、文房具、切手、就中書籍などである。かれが買った多くの書籍の中には、ホーマーからエピクテイトスにいたる古代の著者たちのもの、地理の本、ヘブライの文法書、さらには議会の諸宣言、政治的パンフレットの数々などである[23]。これによってロックの関心が多岐にわたっており、かれが若くしてとくに政治に対して強い関心をもっていたことがわかる。この1650年には、デカルトがストックホルムで死去し、ホッブズが『法の原理』を、『人間論』*Human Nature*と『政治論』*De Corpore Politico*との二部に分けて出版し、翌1651年に、『市民論』*De Cive*（1642年に匿名で出版したラテン語で書かれた著作）をイギリス語版で出版した。さらに、その夏には、あの有名な著作である『リヴァイアサン』*Leviathan*をロンドンで印刷し出版した。この著作によってホッブズへのキリスト教の立場からする非難が高まり、かれは、亡命宮廷への出入りを禁止さることになり、そこで冬にひそかに帰国した。ロックがこのようないわくつきの著作を出版直後に読んだか、どうかはわからないが、政治に関心をもちはじめたかれの視野にぼつぼつ入ってよい著作といえよう。

1652年の春、20歳を迎えんとするロックは、「大選抜」、つまりオックスフォードやケンブリッジに進学するための選抜としてウェストミンスターで知られていた選考を受ける候補者になった。この選抜は、小選抜とは異なり、候補者の知的能力についてのテストではなく、公開の儀式であった。ところが儀式以前の内密の根回しが大選抜にあたって大きな役割を演じた。ロックが大選抜の候補者になったとき、父もロックも熱心に事前運動をしている。このことはロックの書簡によって明らかである[24]。ロックはポパムにも援助を懇請した、と思われる[25]。ロックの希望はかない、5月の下旬にかれはクライスト・チャーチの奨学生に選ばれた。入学を許されたウェストミンスターの同期生としてはJohn MapletoftやThomas Blomerという少

年がいた。かれらはロックの後年の友人でもあった。なお、ロックの学友のなかにはJohn Dryden（1631－1700、桂冠詩人になる）やJoseph Williamson（1633－1701、ロイヤル・ソサィエティー総裁になる）たちがいた。6月にはロックの喜びをよそに、第一次イギリス・オランダ戦争がはじまっている（～1654. 4）。また、フィルマーが『政府起源論』[26]を著している。ロックが当時それに気がついたか、どうかはわからないが、気づけば、かれの関心をひく著作であったといえよう。かれは、この学校に在学中リチャード・ロウア（Richard Lower, 1631－1691）と友人になり、かれの影響でundergraduateの頃より実験生理学（実証医学）に興味を抱き、かれの紹介で1655年から「実験哲学クラブ」に出入りするようになった、と思われる。

Ⅲ　オクスフォード大学の学生

ロックは、1652年の秋、20歳になってはいたが、ポパムに伴われてオックスフォードへ行き、クライスト・チャーチという学寮に入り、その学生となった。かれは、聖霊降臨日に選ばれており、クライスト・チャーチの登録簿の記録によれば、11月27日に入学を許可されており、ジェントリの子息と記載されている[27]。当時のイギリスではオクスフォードとケンブリッジの二つの大学か、またロンドンにあった法学院を卒業することが出世の条件であったから、ロックもそういった出世街道に踏み込み、エスカレーターに乗ることができたのである。ポパムは、ロックがクライスト・チャーチのかれの部屋に落着いて生活するようになるのを見届けるまで数日間オックスフォードに滞在した後にロンドンへ去った。このようにロックの世話をしたポパムは、ロックによって、かれの恩人としてのみならず、法や自由の擁護者として讃えられている[28]。クライスト・チャーチは、ロックの時代には、ウェストミンスター・スクールが最も重要なイギリスの学校であったと同じように、最も重要なオックスフォード大学の学寮であった。枢機卿ウルジー（1475？－1530）が、当時存在していたどの学寮よりも遙に大きくて善い学寮として1525年に計画し、ヘンリーⅧ世が1532年にかれ自身の王室基金による建造物として再構築したのがこの学寮であった。ロックの学生時代には、この学寮の建物は完成しておらず、今日みられるような威容を誇ってはいなかったが、礼拝堂、ホール、中庭は存在し、宗教的・学問的雰囲気を十分漂わしていた、と思われる。しかしながら、オックスフォードは騒乱中に王党派の牙城になっており、クライスト・チャーチは、1642年の秋から46年の春まで、チャールズⅠ世の大本営になっていた、したがって議会派の勝利によって、教員や学生たちの意気はあがらなかった。王党派の大学の首脳は追放され、学生も議会の権威に従うように誓わせられた。ロックの入学した頃には、大学も新しい体制に移行していた。クライスト・チャーチの学寮長にはジョン・オウエン（John Owen）が1651年に任命された。かれはクロムウェルと親しく独立派の幹部であった。かれは、革命後の学内の建直しに当り、後にはオックスフォード大学の副総長にも就任したが、クロムウェルと同様に、つねに寛容の精神をもってのぞみ、国教徒や王党派に組する教師たちを大学から追放するようなことはしなかった[29]。また、オックスフォードで国教派の信仰をもった人びとが私宅でミサを行うことも黙認した、といわれている[30]。かれは「迫害を受けている側から寛容な要求することはすでに度々行われているが、迫害を受けておらず、むしろ、迫害を加える側にいる者が寛容を唱えることは稀である。私はそれをしているのだ」といった[31]。このようにオーェンは、寛容の精神のもち主であって、かれの信奉する宗派が隆盛な時でさえも、いろいろ異なった宗教的信仰を相互に尊重すべきことを説き、神学的な意見の相異を理由にして政治的処罰を課すことに反対していた。つまり、かれは、信仰

の問題に強制力を行使することに反対し、意見を異にする人びとを暴力によっておさえ、反対し、処罰すべきだと主張することは真理の特権ではない、と述べている[32]。したがって、このような主張は政治と宗教との分離という思想に至る。すなわち、かれによれば、為政者が他人の誤りを判定して肉体的刑罰を課することは極めてよくないことである。誤りを犯している人びとに課しうる最大限の手段は勧告、回避、拒否、破門であろう[33]。異端は大きな害悪ではあるが、しかし、精神的な害悪であるから、精神的な方法によって阻止されるべきものである[34]。オーエンはこのように述べたが、しかし、かれの政教分離論は必ずしも首尾一貫していなかった。すなわち、社会の秩序を乱すものを為政者が抑圧すべきことは当然であるが、秩序の破壊が具体的行動にまで至らず、言論の範囲にとどまっている場合（たとえばカトリック、アナバプティスト、クェーカーの説教）でもオーエンはこれに対して行政権の干渉を認めている。さらにかれは、社会的には全く平和的であるが、誤りを積極的に広げる人びとにも、肉体的拘束を加えて神の名誉をまもることが為政者の義務である[35]、と主張したのである。かれは、このように、政教分離に関しては不徹底な主張をしたが、寛容の精神をもっていたことは否定できない。さて、一学生にすぎなかったロックが学寮長オーエンとどれだけ深い個人的接触を持ったかについては明らかではないが、かれがオーエンの清教主義や寛容の精神の影響をうけたことは多くの研究者の述べているところである[36]。だが、ロックは、ピューリタンの潔癖さや狂信に対して不安を感じて、当時Enthusiastsとよばれる狂信者に対して不寛容な態度をとっていたので[37]、オーエンの寛容についての見解をそっくりそのまま受け容れてはいなかったようであるが、しかし、ロックがオーエンつまりこのような寛容の精神をもち実践した指導者のもとに教育を受けたという経験は後のかれの寛容論確立になんらかの影響を与えた、と考えられる。

ロックの入学した学寮の生活はどのようなものであったろうか。起床は午前5時で、ただちに礼拝堂へいって朝の礼拝に出席。朝食は6時、授業は午前中4時間、昼食後2時間行なわれ、夕食は7時であり、多忙な日課であった。さらに一日に少なくとも二つの説教を聞いて記憶し、日曜日の夜6時から9時の間には大学指定の篤信者を訪ねて話を聞き、それを指導教師に報告しなければならなかった[38]。授業への出席は強制され、鞭で打たれることもしばしばであった。指導教師との会話、ホールでの学生たちの間での会話さえもが常にラテン語であった。クライスト・チャーチでのロックの指導教師は、ウエストミンスター・スクールでの先輩である26歳のトマス・コウルであった。ロックが、この学寮で、どのような教育課程を経たか、といえば、アロンによれば、野田が述べたように、まず4ヶ年の前期課程（学士bachelor of artsの資格を得るための課程）では、ラテン語・ギリシア語の習得に関しては学生は教師の個人授業をうける。集まって聴く講義のほうは、第一学年では文法と修辞学とを聴き、第二学年で論理学と道徳哲学とを聴く。（道徳哲学ではアリストテレスのニコマコス倫理学と政治学との詳しい紹介がなされる。）第三学年では論理学と道徳哲学の講義を引きつづき聴くが、幾何学の講義が加わる。第四学年でも第三学年の講義の続きを聴き、かつ公開討論会への参加が義務づけられる。ついで修士master of artsの資格を得るための二ヵ年の後期課程では、アリストテレスの自然学・形而上学が学ばれ、かつ古代史（ギリシア・ローマの歴史及び初期キリスト教史）の講義、天文学の講義を聴くのである[39]。ロックは、学寮では厳格な日常生活を強いられ、教育課程としては中世風の厳しい古典教育を受けさせられていた。したがってかれは、無味乾燥で学生の人間性を押しつぶすような学寮教育のあり方に、ウェストミンスター・スクール以来の反感をますます募らせ、不満や不信を強め、味気ない生活を送ったようである。大学の学友で、生涯に亘って親しかったジェイムズ・ティレル（James Tyrrell）の思い出によれば、ロック

は、近代的試験が取り入れられるまで行なわれていた中世風の討論を「真理の発見よりも口論や見せびらかしの工夫」と批難している[40]。かれは、それにしても、ルネサンス・ヒューマニストを通して古典に親しみ、あるいはスコラ哲学から多くのものを学び、哲学に興味をもつようになった。さらに、修辞学、文法、論理学、道徳哲学、幾何学などをつぎつぎと習得していった。また、かれは、自然科学や医学にも関心をもち、自分で実験し、観察して結果をたしかめることのできる学問にふれることになった。とくにこのオックスフォード時代にかれの思想の形成に積極的な影響を与えたものは、デカルトの哲学と、すでに述べたオーエンの寛容思想であった[41]。

ロックは、大学でスコラ哲学に悩まされていたが、デカルトの著作（多分『哲学の原理』）に接し、スコラ哲学の方法から逃れたけれども、しかし、スコラ哲学から内容的に多くのものを継承した。この点について野田はつぎのように述べている。

「一簡単にいえばデカルトはスコラ哲学の形而上学・自然学を専ら問題にし自然学について画期的な改造を行ったのであったが、ロックは一方でデカルトの自然学を学びつつも、他方デカルトがあまり問題にしなかった道徳論や政治論、ならびに聖書神学と形而上学的神学、に関する問題を、スコラ哲学を継承しつつ新たに考えた、ということになる。それでロックのオックスフォードの学生時代のスコラ哲学学習は、研究員時代にも、道徳論・政治論及び神学に関する『自然法』の理論の考究という形でつづけられていた、といえるであろう。そしてロックがデカルトとちがってスコラ哲学から内容的に実践哲学の問題をうけついだこと、自然神学と自然法との問題を引き受けたことは、かれのおかれた歴史的状況に促されてのことであった[42]」。この頃ロックによって書かれたと思われる論稿がラヴレイス・コレクション（The Lovelace Collection）に残されているが、それはラテン語で記された論理学、あるいはギリシア語の方言や語源についてのものである[43]。当時、大学の外の社会情勢もロックにとっておそらく決して好ましいものではなかった。国王を処刑して自由な共和国になったはずのイギリスであったが、1650年代の姿は、およそ自由とか、民主的とはとてもいわれない政治・文化の独裁がおこなわれていたことは歴史の示すところである。すなわち、クロムウェルは、共和国が成立すると、独立派と同盟していた急進的な水平派を弾圧し、長老派や王党派を抑圧して独裁を強めた。これに対して内外の反抗は絶えなかった。そこで、クロムウェルは、53年4月に残部議会を解散し、選挙によらない指名議会を成立させたが、同年末にはこの議会をも解散し、12月16日に『統治章典』を作り、イングランド、スコットランド、アイルランドの護民官に就任し、政権の強化をはかり、「剣の支配」といわれる独裁の道を辿り、国王をしのぐ絶対支配権を握った。したがって民主化の道は閉され、議会や国民はかかる事態に反撥し、重苦しい空気が世相にみなぎっていた。このような非民主的な社会情勢が後にロックに王政復古（1660）を歓迎させることになった一因ではないだろうか。

1653年の夏のはじめに、ロックはしばらく健康をそこなっている。また、他の多くの学生と同じように、金銭的には楽ではなかったようである。その年の6月に、議会監察官は、すべての学寮の指導教員に、罪を犯した学生たちのリストの作成を命じ、また学寮長に善良なピューリタンでなかった学生たちの退去を命じた。ロックは追放をまぬがれたけれども、そのことはかれの信仰の状態を明かすものではなかった。なぜならば、オーエンは、監察官を喜ばせるために、かれの学寮に所属する学生たちを追放するような人ではなかったからである[44]。だからといって、ロックが不良な学生であったとは思われない。

1654年、オーエンは、クロムウェル、つまり、対オランダ戦争において勝利をもたらしたこの人を讃えるために、大学人たちによって書かれた詩集を出版した。22歳という若いロックも

寄稿者となり、かれの詠んだ詩が二つ含められていた。一つは英語の詩であり、他の一つはラテン語の詩であった[45]。これがロックの最初に活字になった作品である。かれは、印刷物の中ではじめて世に出たが、独裁者を讃美する者に加わってしまった。かれの真意は平和の到来の喜びを表明したかったのであろう。この対オランダ戦争は、オランダの商業上の優位を覆えし、イギリスの繁栄と隆昌、とくにイギリスの商業資本に利益をもたらすためであった、といわれているが、ロックがそのことを自覚していたか、どうかはわからないが、勝利のもたらす平和を率直に喜んだといえよう。平和こそ、かれがこの詩でうたいあげた主題なのである[46]。

1654年（22歳）の秋に、ロックの母は、リントンのかの女の親族を訪問中に病気になり、病状が悪化してベルトンに帰ることができず、ロックの生まれた小さなコテージで、10月4日に57歳の生涯を閉じた。ロックは、葬儀に参列するためにサマーセットに急ぎ、なんとか間にあった。かれは、葬儀の後にオックスフォードに帰ったが、そこで天然痘の発生に出くわした。かれの父はかれの身を気遣かって手紙を書いている[47]。翌1655年（23歳）に、クロムウェルは、国内を11の軍管区に分けて軍人をその長に任命する、という全くの軍事独裁政治を強行し、また、過度なピューリタン的潔癖さを国民に強要して私生活にまで干渉し、演劇さえも禁止した。つまり峻厳なピューリタニズムによる施政を遂行した。若いロックは、このような重苦しい社会情勢をどのように感じたであろうか、おそらく快くは思わなかった、のではなかろうか。ロックが、自身病気をしたり、母を失ったり、クロムウェルの厳しい政策を眼の当りに見た時期はかれの人間形成にもっとも重要な青年後期を終えようという時期であって、かれは、感じ易く傷つき易い豊かな感受性で、自己の不幸や不安定な息づまる世相を敏感に感得していた。かれは、不安と懐疑に襲われ、虚無に陥り、自信を失い絶望し、勉強よりも怠惰と享楽に誘われたが、ただの遊び好きの学生に終り、自分を失ってしまう、ということはなく[48]、ロウアの紹介で「実験哲学クラブ」に出入りするようになった。

この頃、イギリスでは海上権が復活し、海軍は、国民の海外発展にふさわしいものに変り、イギリスは、世界の大海軍国となって、オランダやスペインと対抗し、時には戦端を開いた。かれが、イギリスのこのような対外情勢に対して、どのような認識をもっていたか、について確めることのできる資料を持ち合わせないが、かれは、かれの不安定な精神状態や当時の対外情勢についての乏しい情報から、それらについての大局的な把握をしていなかった、のではないだろうか。1655年の長期の休暇をかれはベンスフォードで過した。母が亡くなった今、かれは父の話し相手としてたよられ、ほとほとうんざりし、オックスフォードに帰りたがっていた[49]。かれは、9月に生涯の友人の一人であるサムエル・ティリィに手紙を書き、オックスフォードを離れていることを嘆いている[50]。おりかえしティリィから1655年9月11日付の返事[51]があり、それにはオックスフォードのニューズが書かれており、とくに注目すべきは、オーエンがさらに二年間副総長を続ける、ことであり[52]、これはロックにとり好ましい事態となった。

1655／6年2月、つまり1656年2月に、ロックはバチェラアー・オブ・アーツの称号を得た。日本流の言い方をすれば、学部を卒業し、文学士の称号を授与された。さらに、論理学・形而上学・史学・自然哲学・古典語（ヘブライ語、アラビヤ語）の勉学を重ねた。東洋語習得にあたってはエドワード・ポーコック（Edward Pocoke）という先生の指導を受けた。この先生は、ロックにオックスフォード時代を通じて、もっとも強い影響を与えた教師の一人で、王党派の熱烈な支持者でもあった。このことは、ロックがピューリタンの子でありながら、ピューリタン革命をよし（是）とせず、かえって後に共和制が崩壊し、王政復古となった時に、それを歓迎している、という事実を理解する上において見逃し得ない重要な要点の一つである[53]。

1656年10月25日付のロックから父宛の手紙によれば、ロックは、ウエストミンスター・ホー

ルでのクェーカー教徒の一団の行状を書き、危険を感じ、ウエストミンスターのホールや寺院の中には踏みいることをせず、署名をしただけである、と書いている[54]。さきほどロックは自信を失い、絶望したこともあったようである、と述べたが、1656年11月8日付の手紙で、ロックは、自分を「ベドラム大精神病院イングランド」という狂気の国の狂人として、「人生の水先案内人」を求め、悩んでいる[55]。ティレルの思い出によれば、ロックは、自分の学問的能力に疑問を抱き、勉強するより陽気な友人たちの仲間になって遊んだり、そうした人たちとの文通を楽しんだようである。アン・エヴリなど幾人かの女性とのエピソードもこの頃のことである。かれは、このように精神的な動揺はあったが、世相を見るしっかりした眼をもっていた。すなわち、1656年11月15日付の父への手紙のなかで、当時、世間を騒がせていたジェイムズ・ネイラァ（James Nayler）裁判の見聞を報じ「クェーカーたちにうんざりしている」と書いている[56]。これは、ロックが狂信者を嫌っていることをよく示しており、ピューリタンの狂人的な態度、とくにその人間性の自由と裕かさを無視した態度はロックにとってとても我慢できるものではなかった。かれは生涯このような態度をもち続けたのである。これは後のかれの寛容論を考える上にも大切なことである[57]。なお、ネイラァについて一言触れば、かれは、風貌がキリストに似ていて、みずから神の子と称して、イングランド西部諸州の無知で貧しい大衆に信奉者をえた。とくに女性の信者が多く、女性たちは狂信の叫び者を挙げながら馬で進むネイラァのあとに従ったのである。かれは、ブリストルで逮捕され、ロンドンで裁判に付された[58]。ロックは胸を撫でおろしたのではないだろうか。

1657年（25歳）、狂信的な長老派のジョン・コナント（John Conant）がオーエンに代わって大学副総長に就任したせいか、ピューリタニズムの厳しさが大学の内外にいっそう行き渡り、ロックはたまらない、いたたまれない気持ちになったようであるが、なんとか我慢して、翌1658年6月28日に、マスター・オヴ・アーツ（修士）の資格を取得し、クライスト・チャーチの研究員（a Senior Student）に正式に選任された。Studentの呼称とはいえ、その地位は他の学寮のFellowの地位と同等であるが、しかし、永久のものではなかった。かれはどのような職業に従事すべきかをもう決めねばならなかったが、そう簡単に決められるものではないことに気づいていた。かれは、激動する社会を眼の当りに見、将来の計画をたてる確信をもっていなかった。同年9月にクロムウェルが世を去り、後継者として指名された三男リチャードは紛糾した軍と議会との対立を解く能力もなく、したがって社会不安と動揺はますます募り、無政府状態を招くことになった。大学に眼を向ければ、1659年、ロックの27歳の時に、コナントによってオーエンはクライスト・チャーチの学寮長を罷免され、レイノルズが復職した。その結果、大学はかつてみられたことのないほど厳格なピューリタニズム的な雰囲気によってすみずみまでおおわれた。したがってロックはいよいよやりきれない気持ちに追いやられた。さらに、1659年のクリスマスと1660年のそれとの一年間に、クライスト・チャーチでは、国政の変遷にしたがって、4人の学寮長が更迭させられた[59]。このようにしてピューリタニズムが政治権力によって大学全体の形勢を左右した。このような傾向はロックになじまず、かれに不安、疑惑や虚無的な感情を抱かせることになった、といえよう。ピューリタンの狂信的な言動やクロムウェル政府の圧力、つまり、権力による宗派的信仰の押しつけはかれに自然科学とくに近代医学の研究にむかわせることになったし、後年政教分離を主張させることになるのである。かれはこうして科学の合理性に大いに共鳴し、理性を尊重することになった。さらに、かれは、実証的な科学を研究すればするほど、狂信の行き過ぎに批判的な意見をもたざるをえなかったのである[60]。すでに述べたロックの父宛の書簡からもわかるように、かれは、狂信者の運動を危険視し、かれらに対して嫌悪感をあらわにし、不寛容な態度を示している。なお、かれは、

この頃オーエンの影響を受けていたようであるが、オーエンの寛容についての見解をそっくりそのまま受け入れてはいなかった、といえよう。ロックは、狂信的で、人間性の自由や「心の裕かであること」を省みないピューリタンの偏狭な態度を容認することができなかった。それにもかかわらず、ピューリタンの狂信的言動は、政府の強制力を行使する威圧的態度とともに、かえってロック—医学を中心とする近代科学に関心をもち、理知を尊重するようになっていた—に寛容の必要を感じさせ、その心情を抱かせ、後に理論としてその主張を展開させ、かれを自由主義者にさせることになった[61]。すなわち、大概によれば、ロックは生まれつきおとなしくて、控え目な人がらで、節度を守って、冷静な性質だった。そうしたロックは、武力に頼って外がわからむりに人々を従わせ、自由を奪う強権のやりかたを苦々しく思い、理知が支配する平和な社会を心ひそかに待望したに違いない。戦いと騒乱の渦巻く世相は、かれの生活の論理にそぐわなかった。かれは狂乱の世に処して自分を守り、自分に忠実に、理知の合理性の正しくてすぐれていることを、ますます確信するようになったのである[62]。このような確信が、かれの寛容の心情を次第に強化し、かれの寛容論のみならず、かれの哲学論、とくに認識論、さらには、政治論、宗教論の基盤になっていたことは否定できない。この確信はかれの当時の生活「経験」から由来した、といえよう。

ロックは、研究員に選任されてから1684年に王室から反国王的不穏分子として疑いをかけられ、その資格を剝奪されてしまうまでの20年間、オックスフォードに不在のこともしばしばあったが、大学の研究室で自由に研究できることになった。この幸運がかれの後年の偉大な業績、すなわち『人間知性論』（*An Essay concerning Human Understanding*, 1689）、『政府論』（*Two Treatises of Government*, 1689）および『寛容に関する試論』（*An Essay concerning Toleration*, 1667）と『寛容に関する書簡』（*Epistola de Tolerantia*〔*A Letter on Toleration*〕1689）となってあらわれることになった。それらの業績が西欧の精神界のみならず現実社会の民主的変革に大きな影響を与えたことは周知の事実である。要するに、ロックの思想形成の歴史の上で、この学生・研究員の時期は、宗教という衣をまとった騒乱という環境のなかで、かれに政治、宗教、とくに政治と宗教との関係、哲学（認識論）、自然科学なかんずく医学に関心を抱かせ、かれの行動傾向の体制をほぼつくりあげ、後年のかれを、紆余曲折を経ながらも、形成する出発点となった、といえよう。また、もし後年のかれの所論の中に、矛盾すると思われる論述や不明瞭な点があるとすれば、それらはこの時期に胚胎した、と思われる。

この拙論の結びとして所論を要約すれば、

ロックは、上述のように、騒乱期に学生生活を通して、人間形成をしたが、その時期にイギリス社会の諸問題を感得し、かれの後年の思想の基調となるものを漸次培っていった。かれは、ウェストミンスター・スクール時代には、古典教育によって基礎的教養を身につけるとともに、バズビの影響を受けることになった。また、国王の処刑にまで突貫した狂信者やその行動に対して嫌悪の情を抱き、バズビの寛容な態度に感化され、寛容に関心をもつようになった。オックスフォード大学の学寮の一つであるクライスト・チャーチに入学したかれは、ジョン・オーエンの指導のもとに、かれのピューリタニズムや寛容の精神の影響を受けた。また、ロックは、スコラ哲学やデカルトの哲学を学んだが、峻厳なピューリタニズムには馴染めなかった。狂信や狂信者をますます嫌悪し、寛容の必要を感じた。それが後年のかれの寛容に関する論証[63]となってあらわれる要因のひとつといえよう。ロックは、一切耳を傾けず、他人の基本的人権を

侵す狂信者を生涯許すことはできなかったけれども、説得によるかれらの回心に望みをかけ、嫌悪しながらもかれらを許容した[64]。かれのこのような態度は、学生時代に当時の社会的環境との相互作用によって形成され、終生保持された行動傾向の基盤的体制のあらわれであり、自由主義という形をとって具体化され、イギリスやフランスをはじめ世界の国々の自由主義化、民主主義化に貢献した、といえよう。

注

1）山本隆基　『レヴェラーズ政治思想の研究』（法律文化社　1986）176－179頁参照。
2）山本　前掲書　178頁。
3）井上公正　『ジョン・ロックとその先駆者たち』（御茶の水書房　1978）149－158頁参照。
4）永岡薫、今関恒夫編　『イギリス革命におけるミルトンとバニヤン』（御茶の水書房　1991年）82頁。
5）井上公正　『ジョン・ロックの生涯と思想の展開（I)』（奈良大学紀要　第24号　平成８年３月）275頁参照。
6）大槻春彦　『ロック』（牧書店　世界思想家全書　昭和39年12月）23頁参照。
7）野田又夫　『ロック』（講談社　人類の知的遺産　36　昭和60年11月）８頁。
8）Cf. M. Cranston, *John Locke*, Oxford University Press, 1983, p.19.
9）野田　前掲書　８頁参照。
10) Cf. Cranston, *op. cit.*, pp.20－21. 野田　前掲書　９頁。
11) Cf. Cranston, *op. cit.*, p.25.
12) 野田　前掲書　10頁。
13) Cf. R. I. Aaron, *John Locke*, Oxford, 2nd ed., 1955, p.3.
14) *The Anarchy of a limited or mixed Monarchy.*
15) *The Laws of Ecclesiastical Polity.*
16) Cf. Cranston, *op. cit.*, pp.20－24.
17) *Ibid.*, p.19. 大槻　前掲書　23－24頁。
18) Cranston., *op. cit.*, p.21.
19) クランストンは、その証拠として*Westminster Abbey Manuscripts*, 4305をあげている。Cf. *Ibid.*,p.21.
20) Cf. *Ibid.*, p.22.
21) Cf. *Ibid.*, p.22.
22) John Locke, *Some Thoughts concerning Education* (*The Works of John Locke*, New Edition, Vol.IX, 1963), §70, p.54.
23) John Locke, *Essays on the Law of Nature*, ed. by W. von Leyden, Oxford, 1954, p.16.
24) Cranston, *op. cit.*, p.26.
25) *Ibid.*, p.27. B. L. *MSS. Locke*, c.32, ff, 8-9 (it is endorsed 'Electio'). Cf.6.Locke to (Alexander Popham?) [May 1632?] (8). E.S. de Beer (ed.), *The correspondence of John Locke*, Vol. 1,pp.10－11.
26) *Observations concerning the Originall of Government.*
27) Cranston, *op. cit.*, p.29.
28) Cf. Leyden, *op. cit.*, p.15.
29) Aaron, *op .cit.*, p.4.
30) 野田　前掲書　12頁。

31) 野田　前掲書　12頁。cf.Cranston, *op. cit.* p,41.

32) J.Owen, *Of Toleration and the Duty of the Magistrate about Religion*, 1648, *The Works of John Owen*, ed. by W. H. Goold, London, 1850-55, Vol. VIII, p.180.

33) *Ibid.*, p.200.

34) *Ibid.*, p.63.

35) *Ibid.*, p.196.

36) Cf.F.Bourne, *The Life of John Locke*, Vol. I, London, 1876, p.172, T. Fowler, *Locke*, London, 1880. p.4, A.C.Fraser, *Locke*, London, 1890, pp.11-2, Aaron, *op. cit.*, p.4, Cranston, *op. cit.*, p.41.

37) Cranston, *op. cit.*, p.41.

38) *Ibid*, p.31.

39) Aaron, *op .cit.*, p.5.　野田　前掲書　13頁。

40) Cranston, *op. cit.*, p.38.　大槻　前掲書　27頁参照。

41) 拙著　前掲書　172頁参照。

42) 野田　前掲書　18頁。

43) B. L., *MSS. Locke* c.32 f.8. Beer, *op. cit.*, p.8.

44) Cranston, *op. cit.*, p.34.

45) *Ibid.*, p.36.

46) 大槻　前掲書　34頁。

47) Cranston, *op. cit.*, p.37.

48) 大槻　前掲書　30頁参照。

49) Cranston, *op. cit.*, p.37.

50) B. L., *MS Locke* c 24, f.276, Beer, *op. cit.*, p.28.

51) *Ibid.*, pp.29 - 31.

52) オーエンは、クライスト・チャーチの学寮長（1651—60）とオックスフォード大学の副総長（1652—1657）とを勤めた。*Ibid.*, p.30. なお、この1655年に、ホッブズが『哲学綱要（哲学体系）第一部　物体論』（*Elementorum Philosophiae sectio prima; De Corpore*）を出版している。翌年の1656年にはジェイムズ・ハリントン（James Harrington, 1611-1677）が『オシアナ』（*Oceana*）を出版している。

53) Cranston, *op. cit.*, p.59.

54) Beer, *op. cit.*, pp.41 - 42.

55) Cranston, *op. cit.*, p.42.

56) *Ibid.*, p.42, 大槻　前掲書　34—35頁。

57) Beer, *op. cit.*, pp.43 - 44.

58) Cranston, *op. cit.*, p.42.　大槻　前掲書　35頁。

59) P. Abrams (ed.), John Locke, *Two Tracts on Government*, Cambridge, 1967, p.31, Cranston, *op. cit.*, p.43.

60) 拙著　前掲書　173—174頁参照。

61) 拙著　前掲書　174頁参照。

62) 大槻　前掲書　33頁。

63) ロックの寛容に関する論証の主要なものは*An Essay concerning Toleration* (1667), *Epistora de Tolerantia (A Letter concerning* [*on*] *Toleration*, 1689) およびこの『書簡』と関連してJonas Proastと行なわれた論争のための長文の往復書簡である。

64) 拙著 前掲書 194－195頁参照。Kimimasa Inoue, *On Locke's View of Enthusiasts*. (奈良女子大学文学部「研究年報」第15号 1972年3月) 91－114頁参照。

Summary

By grasping the personality of a thinker and the process of how his personality was formed, we can better understand his behaviour and his way of thinking. One of the factors which develop the personality is the social environment. My last essay tried to investigate the social environment of Locke's childhood and boyhood, for example, the social situation of those days (including the Civil War), his family's environment and his education by his parents, and so on. This essay tries to investigate the social environment of Locke's youth or his school life of Westminster School and Christ Church, Oxford. In his student days, he formed gradually the foundation of his thought in his later years and fostered especially his tolerant attitude.